

江戸時代の
最新メディア

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。広報の吉澤 明さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。



雅遊五節句之内 七夕

歌川国芳 天保10年(1839)頃

「七夕」が近づくと寺子屋に通う女子たちは師匠に手習いや稽古事の上達を願った詩歌を教わり、五色の短冊にしたためて様々な七夕飾りとともに青笹に結んで、戸外に飾りました。この絵には3人の女の子が描かれていて、一人は短冊に自分の技芸の上達の願いを書いており、二人は短冊やひょうたん型の色紙を青笹に結んでいます。紙で作った投網やスイカの飾りやおぼろぎも用意されており、にぎやかな七夕飾りになりそうです。

ささの葉さらさら

七夕

七月七日は「七夕」です。子どもの頃に「ささの葉さらさら」のきばにゆれる お星さまさらさら きんぎんすなご」と歌ったのではないのでしょうか。

仙台など地域によっては旧暦にあわせて八月に「七夕まつり」を催していますね。

七夕のストーリー

「七夕」というと、天の川の西に

住む機織りの名手の織姫(琴座)と東に住む牛飼いの彦星(鷲座)のお話を思い出されるのではないのでしょうか。織姫の結婚相手を探していた天帝が働き者の彦星を引き合わせて、二人は夫婦となります。

しかし、結婚すると二人はあまりにも仲睦まじく、仕事もせすに怠け者になってしまいます。それに激怒した天帝は二人を天の川で引き離してしまいます。その後二人は悲しみに暮れる日々が続きます。天帝はそれを不憫に思い、一年に一度、七夕の夜だけはカササギの翼に乗り天の川を渡り、会えるようにしたというお話です。

習い事の上達を願う七夕の由来

ロマンチックな物語とともに「七夕」の由来は諸説あって、女性が詩歌や機織り、裁縫の上達を祈る「乞巧奠」という行事が中国から日本に伝わり、平安時代に宮中や貴族の間で行われていたことから始まったといわれます。

江戸時代になると幕府が制定した「五節句」の中の「七夕の節句」として庶民の間で定着しました。特に子どもたちが手習いで通った寺子屋では、女の子が裁縫や手習い、技芸上達の願いを五色の短冊に書いて、青笹に吊るして願う大切な行事だったといえます。今でも幼稚園や保育所などで年間行事として行われているのは嬉しいですね。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note

江戸ミニ知識

七夕の青笹はどこに飾ればいいのか？

「たなばたさま」の歌詞にあるように「のきば」に揺れるように飾ればいいのですが、でも「のきば」って？「のきば」は漢字で「軒端」と書きますから、家の軒(のき)の端に飾ればいいですね。

ここで紹介した作品はウェブサイト「くもん子ども浮世絵ミュージアム」<https://www.kumon-ukiyo-e.jp>でもご覧いただけます。

【文・写真提供●公文教育研究会】